

昭和43年度(第31次・第32次・第33次)

難波宮跡調査報告書

大阪市教育局



序

難波宮跡の第31次、第32次、第33次の発掘調査は、第30次調査の後をうけて昭和43年8月17日より9月12日にかけての第31次、10月31日より44年2月26日に至る第32次、昭和44年3月8日より、3月31日に至る第33次の都合3次にわたって実施せられ、第31次は近畿電気通信局敷地南側、築港一深江線の路面下に、第32次は、東区内久宝寺町1丁目の上二病院建設予定地内に、第33次は、東区法円坂町元大阪管区行政監察局構内に於て、いずれも発掘調査を実施したことであった。第31次の路面グリーンベルトに接続する、地域の発掘は往古の大安殿宮址の一部を掘開したのであり、それによって、大安殿遺構の一部の状況を明らかにし、第32次の上二病院建設予定地の発掘はかなりの木簡を土中より発見して、将来発掘に何程かの示唆を得る成果を収め得たのであり、第33次はかなり広範囲にわたる地域の開発をなし小安殿址の地下の状況を知る上に興味ある成果をもたらし、かなり広般な敷地内に亘る小石敷の存在したことを知ることが出来たことであった。

1969年4月

難波宮址顕彰会専門委員
難波宮址研究会代表

山 根 徳 太 郎

第31次発掘調査概要

調査箇所 大阪市東区法円坂町
近畿電気通信局敷地南側 築港—深江線・東行車道面の一部
調査期間 昭和43年8月17日～9月12日
調査者 大阪市教育委員会

すでに第15次～第21次にわたって実施した難波宮内裏地域の調査結果、「天武朝」内裏地域内に、渡り廊で結ばれた「内裏前殿」・「内裏後殿」を中心として、「東殿」・「東門」・「北殿」などの存在が明らかにされて、その宮殿配置の特異性が注目された。

特に、第18次調査で発見された「内裏前殿」は、これまでに発見された「天武朝」建物中最大の規模を有しており、「天武朝」難波宮の中心的存在であったと考えられ、その全貌を明らかにすることが望まれた。しかし建物の大半が大阪市の幹線道路である「築港—深江線」の下にあって、発掘調査に種々の制約があったこと、その他の緊急調査に追われたために、桁行総長および桁行柱間寸法を知り得たので、全体の規模を確認するには至らなかった。

しかし、「内裏前殿」の規模と構造を明らかにすることは、「天武朝」難波宮を解明する上に不可欠の前提作業であり、現在着工中の船場地区の工事が完成して、「築港—深江線」が全通することになれば、交通量が飛躍的に増大、将来路面の発掘調査はほとんど不可能になることが予想されるので、今回調査にふみ切ることとした。

調査に際しては、大阪府警・東警察署・大阪市土木局の理解ある協力を得たが、何分にも交通の激しい路面での発掘調査であるために、種々の制約をまねかれることができず、発掘できたのはわずかに約48m²にすぎない。

調査区画の設定にあたっては、「内裏前殿」の桁行総長を確認することを第一とし、「内裏後殿」の例にならって、桁行総長を5間等間と推定し、その東南隅にあたる南側柱3ヶ所を発掘することとした。

その結果、推定通りの位置に柱穴を発見し、桁行総長を明らかにすると共に、桁行柱間も最初の推定通り、5間等間と考えて差しつかえないことを確認した。

第18次調査と今回の調査の結果を総合すると、「内裏前殿」は東西棟で、桁行9間(36.3

m)、奥行5間(18.75m)、4面廊付の掘立柱建物である。柱間は桁行が、3.75m+3.75m+4.05m+4.35m+4.50m+4.35m+4.05m+3.75m+3.75m となっており、奥行は、3.75m等間となっている。

柱穴は、側柱で径60cm、身舎柱で径73cm という巨大なもので、まさに、「長柄の宮に真木柱太敷きて」と万葉集に歌われた情景をほうふつとさせるものがある。

また、柱を抜きとった穴には、天武天皇朱鳥元年(686年)の焼失の際のものと思われる焼土がつまっていた。

また、これまでに「内裏後殿」・「東殿」・「東門」において見られたことであるが、「内裏前殿」においても各側柱の外方約1mの所に小柱穴が1個ずつ付属しており、東南隅の側柱には東と南に1個ずつ計2個の小柱穴が存在しており、これが建物の東南隅であることを示していた。

この小柱穴と側柱との重複関係を見ると、小柱穴の掘形が側柱の掘形を切って穿れており、更に側柱の柱のぬきとり穴が小柱穴の掘形を大きく切っているのが観察されて、小柱穴が側柱より時期のおくれるものであり、おそらく補修または補強のための「添え柱」であったと思われる。そして、この小柱穴を伴うことが「天武朝」建物のひとつの特色であるといつてさしつかえないとすれば、これらの事実は、「天武朝」と仮称している遺構が孝徳朝の長柄堂崎宮にまで遡りうる可能性を高めるものといえよう。

第32次発掘調査概要

調査箇所 大阪市東区久宝寺1丁目 上二病院建設予定地内
調査期間 昭和43年10月31日～44年2月26日
調査者 大阪市教育委員会

調査地点

発掘地点は天武朝朝堂院の外側であるが、十二堂院の東および南回廊と朝堂院（推定）東回廊の接合部のすぐ東にあたり、標高で宮城中心部より約3m低くなっている。

調査経過

上記地点へ上二病院建設の計画がなされ、敷地が難波宮宮域に属することを知った病院側は、43年7月頃、大阪市教育委員会に対して学術調査を行うべきではないかと申し入れて来た。

ところが第30次調査が続いていたことと敷地内建物の解体のおくれもあって、発掘調査が開始されたのは10月末になってからであった。この調査によって、遺構の発見とともに宮址関係の地形を復原しうる資料の入手にも期待がもたれた。しかし、ボーリング調査によると相当深くまでかく乱が想定された。パワーショベルによる掘削を行うと、敷地西端より約10mのところで、東へびの青灰色粘質土層の大きなかく乱に出会った。そこで、当初の計画を変更し、比較的遺構面がよく残っている西北部へ約330m²拡張した。そして一辺80cmのものを最大とする方形掘形をふくむ約20個の掘形を検出した。

ところが、さきにかく乱と考えていた部分から「はし」など木製品が多数に出土し、平城・藤原宮址のものに類似するところから、難波宮にも木簡があるのではないかと期待がもたれた。はたして12月6日にかく乱の残土中より、上部に切込みをもち、「進上」と墨書のある木簡を発見した。ただちに、奈良国立文化財研究所に連絡し、調査・保存の方法などの指示をうけた。木簡出土層を確めた結果、それはおもに黒色有機質層に包含されていることが判明したが、パワーショベルによってその包含層の一部がすでに掘り返されていることも知った。そこで掘り返されたかく乱土を念入りに手でほぐしながら、木簡および木製品の採集をはじめた。

一方調査団側から出されていた調査期間延長の申し入れは、病院側の精査要求に対する解決策がなかったため、2月20日をもって調査は打ち切られることになった。

そこで急いで、遺物の採集と旧地形の状況を知ることとを目的として、第1期工事の範囲と木簡の出土が予想される範囲を含めて430m²の調査区域拡張を行った。ここに東西2本、南北2本のトレンチを入れ、層位関係を調べた結果、南北トレンチでは1mあまりの灰色粘土層が存在し、それは宮殿造営時宮域全般にわたって行われたと考えられる整地層で、宮殿造営前の土器を多量に含んでいることが確かめられた。この地域で南へ急激に傾斜しているため整地層もかなり厚くなっている。

また、東西トレンチでは、地山は東へゆるく傾斜しその上に暗褐色粘土層が約1.5mの厚さで盛土され、聖武朝の瓦を含んでいる。これは今までの調査では発見されていない整地層であり、その的確な時期、性質は不明である。これら二回にわたる整地層の関係は、近世の土壌その他でかく乱されていることもあって直接には明らかでない。ただ一部での推積の状況と、包含遺物の年代の点から上下関係は示しうるが、明確な層序については今後の課題としておく。

建物柱穴群

調査地の西北部、東西約10m、南地約5mの小範囲に現地表面から50～70cmの浅い面で地山がよく残っていた。そこに一辺50～60cmの掘形6個、1辺80cmの掘形2個と他の小掘形を含めて約20個の掘形が存在した。これらの掘形は柱列の通りや、柱間寸法などから一つの建物として考えられるものは少なく、所属の時期についても、天武朝あるいは聖武朝の難波宮関係のものか、これまでの調査で発見された飛鳥時代の集落址と関連するものか明らかにし得なかった。

しかし、今後北側の道路下を調査する機会があればさらに詳しくこれらの遺構を解明できると考えている。

近世初頭の土壌

宮殿造営時の整地層に重複して存在する東西15m、南北10mの楕円形土壌で、底はほぼ平らである。調査区域内で東および南には土壌の壁面はないが、西と北はそれぞれ1.4mと1.2mの深さで崖状に落ち込んでいる。土壌の堆積は灰色粘土層の上に、黒色粘質土層が平均25cm、青灰粘質土下層部が平均30cmあり、部分的に植物層と砂層を混えている。

木簡をはじめ近世遺物が出土する層は土壌底部のほぼ全般をおおひ、西壁に向かってはそ

の傾斜面まで拡がりをみせているが、西側からの腐葉状況を意味するものかも知れない。この土壌の成因は不明であるが、宮殿の整地がここで急に段を作るとは思えず土取りなどのため削られた後、水のある状態で腐葉物が堆積し保存されたものと考えたい。調査地内にもこれ程深くないが、窪地の重なりがみられ、周辺部にも同じ状態の包含層が十分予想しうる。

出土遺物

《木簡》 墨書が存在する木片は26点あり、その内容は、(表)「米五斗入林□介」・(裏)「二月十六日」(図版7-ⅡB)や「大豆五斗松山九兵衛」(図版7-ⅡA)の如き付札状木簡以外に、文書風木簡、数量を記載した曲物の断片および墨画片等である。いずれも年号の記載はなく、直接にはその時期を判明せしめるものではない。

しかし、すでに昭和28年の第1合同庁舎建設の際に、長さ15cm・幅3cmの「えふ」状の木片が出土しており、その表には、

裏には、「日向納 □□ □□ 右衛門尉」

と墨書されていた。

伴出遺物には、瓦片・宋銭・染付陶片の他に大阪城築城時の金瓦があり、『大阪城の研究 1』では、秀吉在位時のものと推定しており、今回の墨書木片も、伴出遺物や出土情況の類似から、出土当初に期待されたような難波宮関係のものではなく、近世初頭の遺物としてよいであろう。

《木簡以外の遺物》 上記の木簡と同時に、木器類として、はし・へら状木器・曲物・折敷の断片・桶側と底板・樽の鏡板と栓などが出土している。飯碗としての漆器は肉厚く、高い高合をもつ江戸初期のものであり、文様も自由で雑器にふさわしい。ほかに櫛や下駄が数点ずつ出土している。陶磁器類には、すり鉢、灯明皿・瀬戸天目などの破片と若干の染付片があり、瓦は、鬼瓦や完形の丸瓦を含めてかなり多く、大阪城関係のものが主で、金箔を押した桐文飾板瓦と軒丸小片が出ている。

また、釘・宋銭・石製品・土製品の他に、骨・貝・種子・雑木等の動植物遺体も出土しているが、漆器・木製品・陶器において部分的に焼け痕のあるものが多いことを付記しておく。

あとがき

今回の調査は調査期間を限られたこともあって遺構の性格を十分明らかにすることができなかったが、台地傾斜面にまで二度にわたって難波宮造営のための大規模な整地がおこなわれている事実は、第30次調査によって難波宮朝堂院外方にあたる大阪市教員会館構内の青少年センター敷地から重要な宮殿遺構が発見されていることと共に、難波宮の宮域が相当広範囲にわたっていたことを示すものといえよう。また、近世初頭の時期に降るとはいえ湿潤な粘土層の存在によって、木簡を含む数多くの木製品を出土したことは、石山本願寺や大阪城など中・近世遺構の調査の必要性和重要性を示すと共に、将来難波宮の木簡が発見される可能性を高めるものである。

最後に病院建設という社会的な要請の中で、調査がここまで進みえたことはひとえに病院当局の甚大な好意によるものであることを公表しておきたい。

なお、第32次調査の実施ならびに木簡の解説にあたっては大阪市立大学直木孝次郎教授、帝塚山大学藤沢一夫氏、奈良国立文化財研究所の田中稔、狩野久、田中琢、藤原温子氏、大阪市立博物館の上田さち子氏の御教示を得た。また出土品中の漆器、陶磁器については国立京都博物館の吉村元雄、藤岡一氏の御教示を得た。ここに記して謝意を表したい。

第33次発掘調査概要

調査箇所 大阪市東区法円坂町 旧大阪管区行政監察局構内
調査期間 昭和44年3月8日～昭和44年3月31日
調査者 大阪市教育委員会

第33次調査は、昭和36年春に実施した第13次調査によって発見された聖武朝難波宮大極殿後殿（以後小安殿と仮称する）と、それに重複して存在する天武朱鳥元年に焼失したと考えられる建物（以後天武朝と称する）のおおの全体像を明らかにすることを主眼として行った。調査の便宜上第13次調査地をもちあわせて再発掘した。

その結果、聖武朝小安殿については、ほぼ従来の推定通りのものになることを確認した。天武朝については、再考を要する新事実を発見した。しかし、天武朝建物の性格を明らかにするためには、隣接地域を調査する必要があるので、引き続き第34次調査として、第33次調査地の西、北辺を拡張する予定であるが、とりあえず第33次調査で明らかにした事実の概要のみを報告する。

調査はまず小安殿基壇の残存状況を確認するため、宮址の中軸線にそって南北に、推定南側柱列上に東西に、手掘で二本のトレンチ（巾3m）を入れた。南北トレンチの北部で現地表下約80cmで石敷面にあたり、石敷を切って巾1.2mの小安殿落溝の埋土と考えられる灰黒色土が帯状に続いていた。その南50cmには、凝灰岩の基壇地覆石が現位置をとどめて残っており、階段に関係するものと考えられた。

東西トレンチでは、東半は柱の痕跡が認められず、西半は第二次大戦時に掘られた防空壕のため破壊されており、小安殿の柱位置を確認することはできなかった。

次に調査予定地全域をパワーショベルで掘穿することに踏切った。荒掘りは遺構面より若干上面とどめ、遺構面の検出にあたった。

西半はほとんどが地山面を露出していたが、東半は地山面が低く、灰色粘土層や褐色の遺物を含んだ整地層、基壇築土などが複雑に重なっており、遺構検出は困難であった。

調査は比較的簡単な西半部を優先し、トレンチでつかめなかった小安殿の柱位置の確認および基壇痕跡の追求に全力を注いだ。

基壇痕跡は、北・西・南の三方で凝灰岩の地覆石の痕跡が部分的によく残っており、痕

跡が残っていないところも土壌の露土がよく残っていた。第13次調査の結果と総合すると、基壇総長は、東西33m（天平尺110尺）南北12m（40尺）ほどと推定された。

基壇の北面をめぐる溝の埋土を掘ると、溝の側石および底石の抜きあとがはっきりと残っており、側石の大きさは巾15～20cm、長さ40～50cm、底板石は巾40cm、長さ50～60cmと復元できるほどであった。ところが溝の造りは、外側は側石が二段になっているのは同じであるが、内側では、底石をはさんで側石の立つ状態のところで、底石と接して上にあるような状態で側石のおさまるものと二通りの仕事の痕跡が認められた。最初、中央部の地覆石の残存状態と考えあわせて、階段の場所を考えたが、確証は得られなかった。

また溝側石と基壇地覆石との間には巾50mほどの凝灰岩の板石が敷かれていた痕跡が認められた。この板石の敷かれた状況を見ると、側石の二様のあり方も、外部から見た仕上りの状況は全く同じとなり、単なる作業過程の問題にしかすぎない。ここでも北面で階段の存在を知る手がかりは既述の地覆石一つがあるにすぎなかった。

基壇南面は、防空壕のために相当破壊されているが、何とか状況はつかめた。北面と異なり、溝はめぐっていない。第13次調査で発見した凝灰岩の溝石は、小安殿で行きどまりになっていたのはすでに予想していた通りであった。一方、溝は存しなかったが、基壇地覆石の外側で石敷との間に凝灰岩板石を敷いた痕跡が認められたのは北面と同様である。西面でも小安殿と回廊の間で両方に地覆石の痕跡があり、その間に約50cmの板石の抜きとった痕跡が認められた。仕事の細部についてはわからないが、基壇のつくりを示すものと考えられる。

南面の石敷面を追求すると、中央部で約7mにわたって切れる部分があり、そこでは、凝灰岩痕跡も石敷と平行して南北に走り、基壇が出張していることが明らかとなった。これは大極殿と結ぶ軒廊と考えられる。

小安殿の柱位置については、遂に確認できなかったが、天武朝の掘形や抜形をおおって聖武朝の基壇築土が基壇の南北に巾約2mの帯状で、しかも若干掘込まれていることが明らかになった。

また小安殿にとりつく回廊は、第13次調査で明らかにされたように、3.10m（天平尺10.5尺）×2間の複廊であり、いずれも掘立柱である。しかし、一部の掘形内は、礎石の根石かと思われる自然石や瓦片が混入しているものもあった。第17次調査の大極殿回廊の調査で発見された柱間の違う回廊の存在を考えると、何回かの造替を考慮する必要があるかもしれない。

周回の石敷面は、北面が南面より少し高く、南面では軒廊脇が高く、東西に低くなっている。宮址全体の地形は、北が高く、南へ低い傾向にあるので、小安殿の北の雨落溝では

北からの水を受け、南面には溝を設けず、自然の排水にまかせたと考えられる。

出土遺物は、重圓文瓦板、重圓文軒円瓦・軒平瓦、隅軒平瓦、面戸瓦などであるが、小安殿の屋根と軒殿の屋根とは瓦の大きさを使いわけたようで、瓦の大きさが、出土地点で異なっており出土しているのが興味深い。

次に聖武朝と重複する天武朝の建物は、基礎痕跡を全く残していないが、幸い全てが掘立柱であるので、柱穴から建物の復原が可能である。

第13次調査では建物の東妻の部分で調査され、東西棟で奥行3間の建物の北側1間分に単廊がとりつく形になるのではないかと推定されていた。ところが、今回の調査が進むにつれて、単廊と考えていた回廊の柱の北に焼壁や木炭の入った柱穴があること、柱間が約2.4mで等間になることから、複廊になることが明らかになってきた。しかも西妻部分でも同じ結果がみられた。その結果、従来推定していたような建物であれば、建物と回廊がうまく接続しないことがわかり、建物の規模、構造についても再検討の要が生じた。

そこでこれまで天武朝建物の東妻柱穴と考えられていたものについて精査をおこなったところ④建物の北側柱と南側柱と考えられるものは、直径65cm以上もあるのに対し、身舎の中柱は直径約45cmで回廊の柱と同じであること⑤身舎の南側柱と考えていた掘形痕は、聖武朝小安殿の基礎痕跡に関係するものであるらしく、天武朝柱穴でないことなどが明らかになった。

また最初の南北トレンチの北端で聖武朝石敷の下層で発見された柱穴は柱筋や柱間距離が一致すること、焼壁を含むことから天武朝に属するものであって、これまでに調べた各柱穴と共に同一建物になる可能性がでてきた。その結果、天武朝建物については、従来の推定は誤りであって、東西棟7×2間(桁行約4.65m等間、奥行約6.1m等間)の門のような建物の両側に奥行2.4m×2間の複廊が取付くのではないかと考えられるにいたった。

この建物の柱掘形は、一辺が2mを越える大きなものであるのに、掘形の下部では、柱の入り部分だけを掘り下げたのが一つの特徴である。さらに整地層のあるところの掘形の内部には、一定の高さで小石を敷きつめているのも特徴である。また回廊掘形の底に礎板の入っているものも発見された。いずれも立地の特徴や造営技術の一端を示す資料として興味深い。

天武朝に先行する柱穴の存在は一部確認されているが、全体としては聖武朝の築土の下になったり、かく乱を受けたりして明らかではない。また天武朝建物の特徴の一つでもある側柱の外側をめぐる小掘形については調査地域の限定と防空壕によるかく乱などで明

らかにできなかった。天武朝建物の規模、構造の確認を含めてひき続き行う第34次調査の中で明らかにされることを期待したい。

なお第33次調査に関して大阪工業大学教授浅野清博氏、帝塚山大学藤沢一夫氏、奈良国立文化財研究所沢村仁博士の御教示を得て調査を進め得たことを記して感謝の意を表したい。

第31・32・33次発掘調査参加者

(一週間以上参加した者のみ。このほかに多くの方々の御支援を得た)

山根徳太郎(難波宮址顕彰会専門委員、文学博士)

中尾 芳浩、八木 久栄(大阪市立博物館)

吉本 俊俊、長山 雅一、中川 信作、吉光佐知子、村上 保二(難波宮址顕彰会)

林 紀昭(京都大学大学院)

山崎 道治(大阪市立大学大学院)

宮本 郁雄(電谷大学大学院)

大地 敬三、恵丁 道明、黒沢 陽一、木原 克司、渡辺 徹、長谷川孝一、清水 泰明、

吉岡 敏幸、中村 善則、福田 計子、小松 幸子、柳沢やよい(大阪市立大学)

井守 徳男、松岡 崇介(立命館大学)

岡本 一士、清原いつ子、仲田恵美子、竜野 静世(電谷大学)

近藤 滋(国学院大学)、八木下好子(大阪教育大学)、福田 裕(近畿大学)

北山 淳(大阪経済大学)

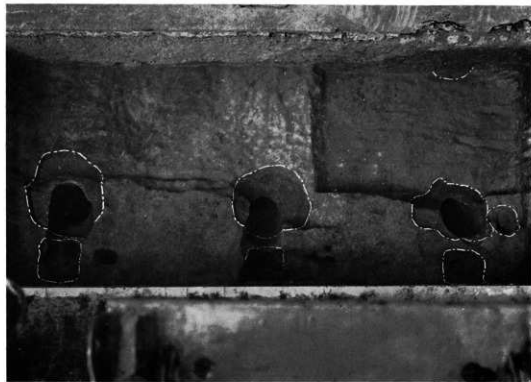
高木 圭右、河本 良一、河本 信二(河内歴史研究会)

図

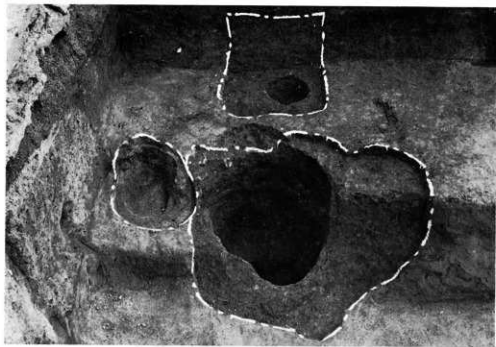
版



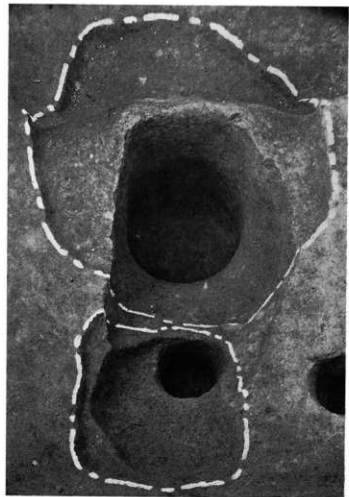
① 第31次 調査地点遠望（北西より）



② 第31次 調査地城全景（南より）



③ 第31次
天武朝内裏前殿
東南隅柱跡（北より）



④ 第31次
天武朝内裏前殿柱跡
（南より）



⑥ 第32次 調査地域全景（東より）

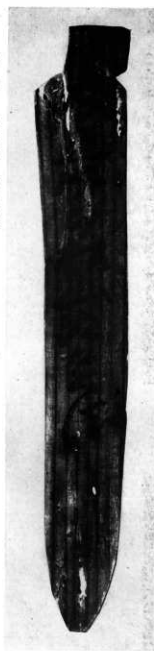


⑧ 木簡が出土した近世初頭の土塋（南より）

(四) 表 米五斗入 林口介
裏 二月十六日



(A) 表 大豆五斗 松山九兵衛



⑦ 第32次調査出土木簡



⑧
天武朝門址(?)中央柱列と聖
武朝基壇整地(東より)

⑨
聖武朝小安殿基壇南辺と
軒廊基壇
周辺の小石敷は聖武朝地表
(東南より)



⑩ 聖武朝小安殿と回廊の溝跡の接続部分(東より)



⑪ 聖武朝小安殿背面溝石の抜きとり跡(東より)

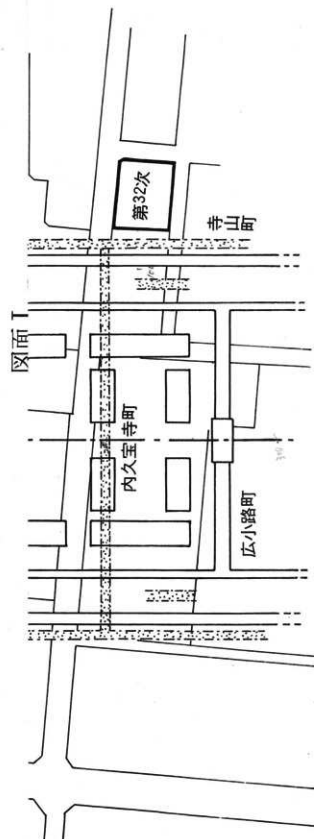
昭和43年度（第31次・第32次・第33次）

難波宮跡調査報告書

昭和44年4月

編集・発行 大阪市教育委員会

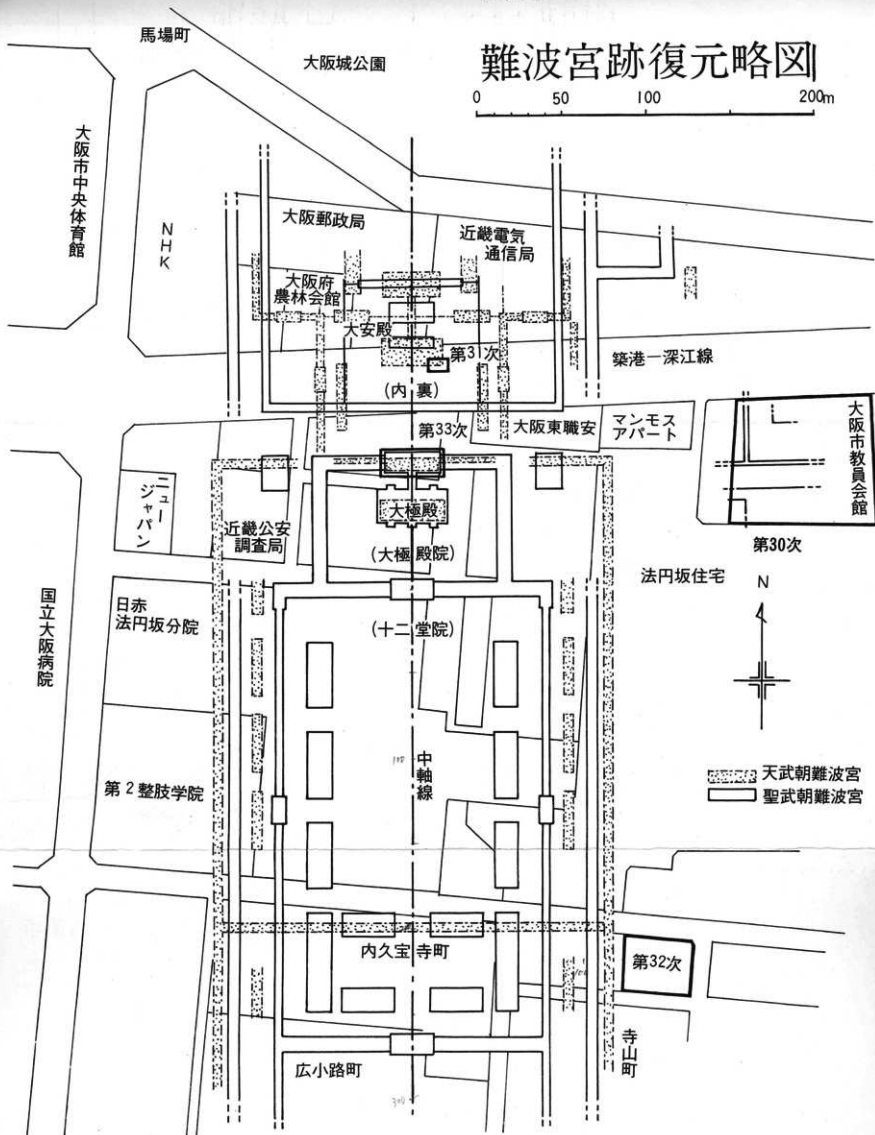
（印刷 ナニワ印刷株式会社）

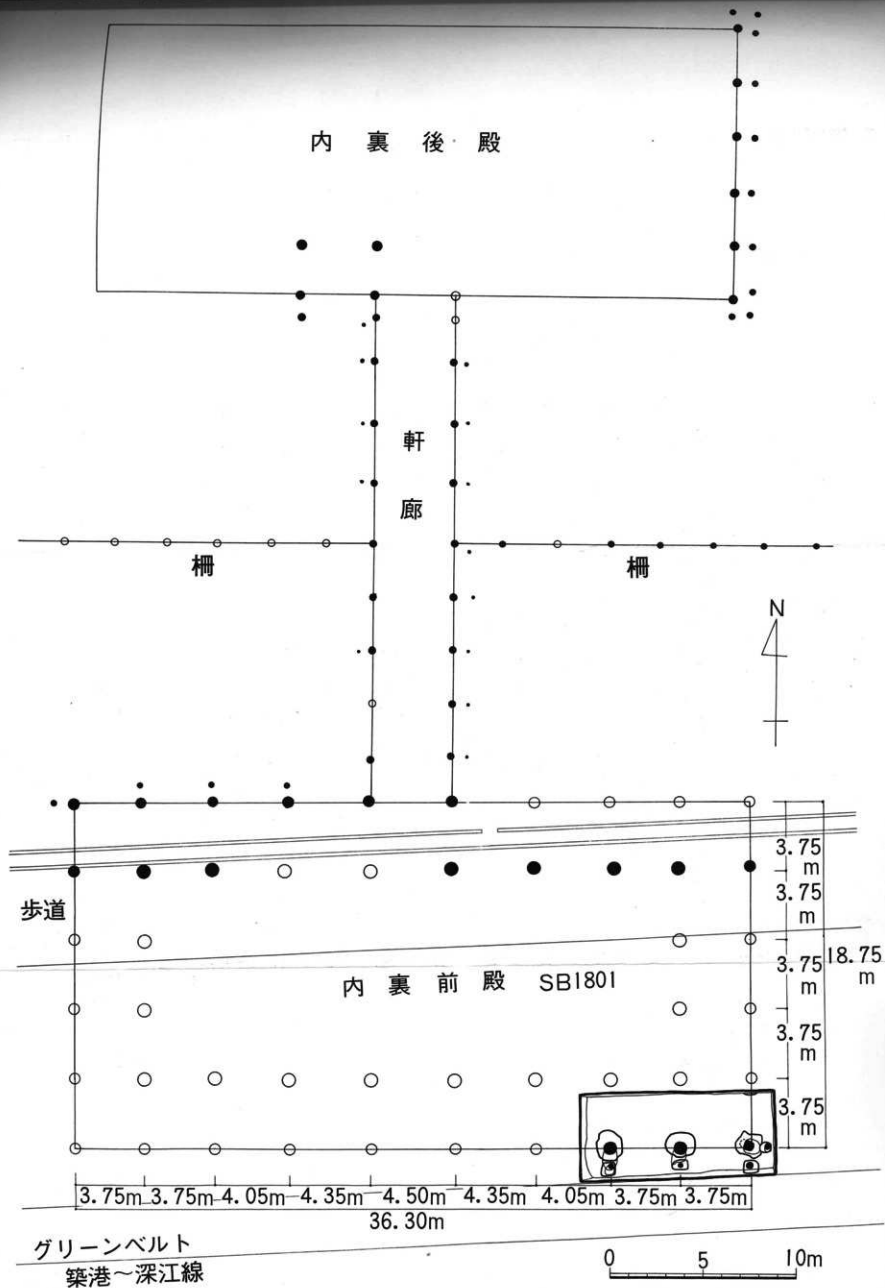


図面 I

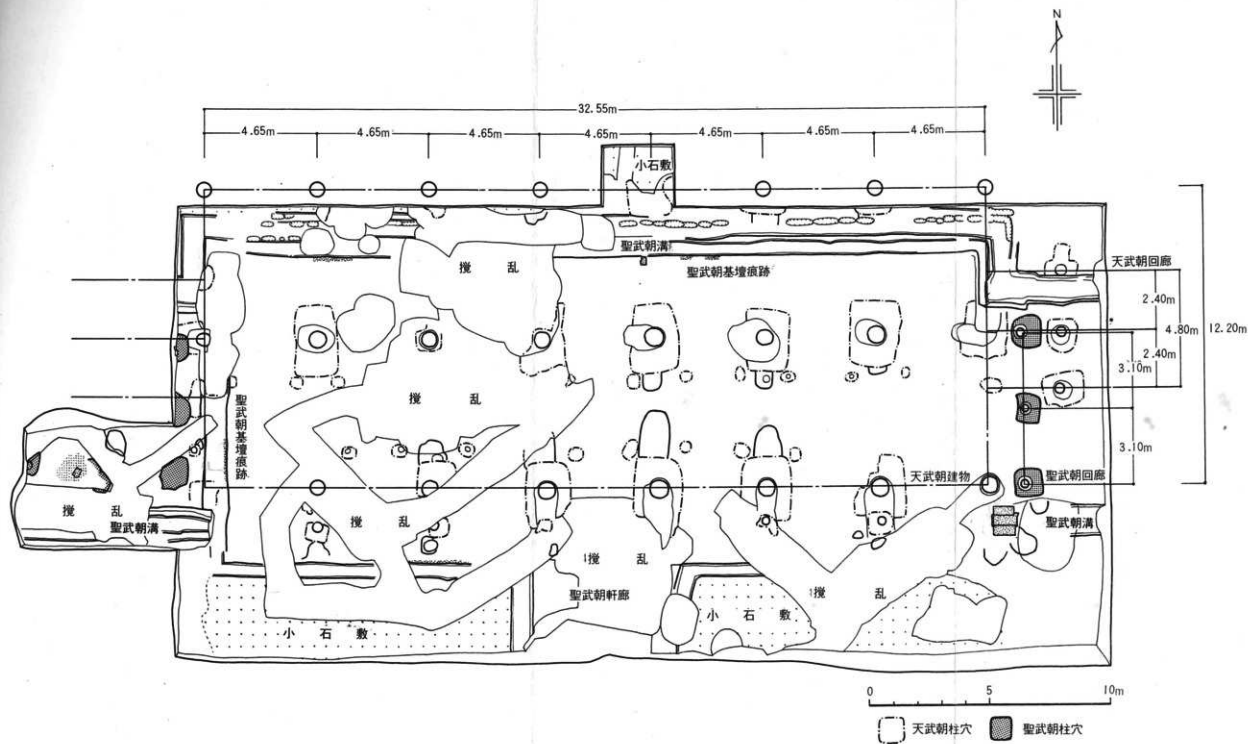
難波宮跡復元略図

0 50 100 200m





図面Ⅱ 第31次調査実測図及び天武朝内裏中心建物関係図



図面Ⅳ 第33次発掘成果略図